

Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』の 前行儀軌について

伊 集 院 栞

1. 『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌

Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』(**Trailokyavijayamaṇḍalopāyikā*)¹⁾ は、『真実撰経』(*Sarvatathāgatattvasaṃgraha*) 所説の降三世大マンダラを主題として、マンダラの観想法・マンダラの作成・弟子の灌頂儀礼を解説した儀軌書である。この儀軌書のマンダラ観想法は、マンダラを作成するにあたって阿闍梨が事前に行うべき「前行」(*pūrvasevā*) として位置付けられるため、以下、前行儀軌と呼称する。杉木 1995 によれば、この儀軌書の前行儀軌は同じ著者による金剛界大マンダラに関する儀軌書『一切金剛出現』(*Sarvavajrodaya*) に説かれる前行儀軌とほぼ同じ内容を有しているという。しかし具に見るならば、『一切金剛出現』との差異を見て取ることができる。本稿ではまず『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌のシノプシスを提示したのち、この二儀軌書の相違点について考察する。

2. 『降三世曼荼羅儀軌』前行儀軌のシノプシス

下掲の表は、左段に当儀軌書の項目名とロケーションを、右段に『一切金剛出現』の対応箇所とセクション番号を示したものである。当儀軌書の前行儀軌は大枠として『一切金剛出現』の形式を踏襲しているが、「2. 阿闍梨の特徴」や「3-1. 沐浴」など『一切金剛出現』には見られない規定を含んでいる。

『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌	『一切金剛出現』の前行儀軌
1. 帰敬偈 [D 67a4; P 76a2]	帰敬偈 (§1)
2. 阿闍梨の特徴 [D 67a4; P 76a3]	
3. 自身加持の前行	自身加持の前行
3-1. 沐浴 ²⁾ [D 67b1; P 76a6]	沐浴, 舌と両手の加持 (§§2-3)
3-2. 舌と両手の加持, 護輪 ³⁾ [D 67b6; P 76b5]	護輪 (§§4-16)

3-3. マンダラの化作 [D 68a1; P 76b7]	マンダラの化作 (§17)
3-4. 敬礼 [D 68a2; P 77a1]	敬礼 (§§18-19)
3-5. 懺悔, 随喜, 勧請 [D 68a6; P 77a6]	懺悔, 随喜, 勧請 (§§20-21)
3-6. 供養 [D 68b4; P 77b4]	供養 (§21)
3-7. 自身の奉献, 廻向 [D 70b5; P 79b7]	自身の奉献, 廻向 (§22)
3-8. 律儀の受持 [D 71a2; P 80a4]	律儀の受持 (§23)
3-9. 共通の印を結ぶこと [D 71a7; P 80b2]	共通の印を結ぶこと (§§24-27)
4. 自身加持 [D 72a2; P 81a5]	自身加持 (§§28-29)
5. 一つのヨーガを行う場合	
5-1. ヴァジュラフーンカーラの大印成就 [D 72a6; P 81b4]	
5-2. 集会の成就 [D 72b7; P 82a5]	
5-3. 五仏の四印刻印 [D 73a1; P 82a7]	
5-4. 四処加持等 [D 73b3; P 83a3]	
5-5. 自身灌頂等 [D 74a1; P 83b1]	
6. マハーヨーガを行う場合	
6-1. 自身灌頂 [D 74b7; P 84b2]	自身灌頂 (§§30-38)
6-2. 三十二尊の大印成就 [D 75a5; P 85a1]	二十八菩薩の大印成就 (§§39-47)
6-3. 集会の成就, 四印刻印, 四処加持等, 自身灌頂 [D 75b5; P 85b2]	集会の成就 (§48) 五仏の四印刻印と四処加持 (§§49-50)
6-4. 尊格の配置 [D 75b6; P 85b4]	三十二尊の四印刻印 (§§51-54)
6-5. 三マントラの読誦等 [D 76a3; P 86a1]	神変 ⁴⁾ (§§55-59)
7. 胸のマンダラの観想 [D 76a7; P 86a6]	
8. マントラの意味 ⁵⁾ [D 76b3; P 86b2]	
9. 三三昧	三三昧
9-1. Ādiyoga [D 76b6; P 86b6]	Ādiyoga (§§60-67)
9-2. Maṇḍalarājāgrī ⁶⁾ [D 77b7; P 88a1]	Maṇḍalarājāgrī (§§68-73)
9-3. Karmarājāgrī [D 81b4; P 93a7]	Karmarājāgrī (§§74-75)
9-4. 三三昧の完成 [D 81b6; P 93b1]	三三昧の完成 (§§76-83)
10. 観想を終えるときの儀礼 [D 82a3; P 93b6]	観想を終えるときの儀礼 (§§83-86)
11. 日時の規定等 [D 83a1; P 94b5]	日時の規定, 胸のマンダラの観想, マントラの読誦 (§§86-88)

3. マハーヨーガと一つのヨーガ

『降三世曼荼羅儀軌』に顕著な特徴として、自身加持以下の次第を、マハーヨーガ (mal 'byor chen po) を行う場合と一つのヨーガ (mal 'byor gcig) を行う場合とに分

(92) Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌について (伊集院)

けて設定する点が挙げられる⁷⁾。上掲の表で両者の次第を比較すると、四処加持までは共通していることが分かる。その後に規定される儀礼については、いずれも『一切金剛出現』の「神変」に説かれる諸儀礼に類似しており⁸⁾、内容は異なるが前行儀軌全体に果たす役割は同じであるといえる。両者の次第の相違点は、一つのヨーガを行う場合に大印成就法の前の自身灌頂が規定されないことと⁹⁾、大印成就法で観想する尊格の数が異なることにある。特に二点目について、マハーヨーガを行う場合にはヴァジュラフーンカーラから金剛鈴までの三十二の尊格を観想するのに対し¹⁰⁾、一つのヨーガを行う場合にはヴァジュラフーンカーラのみを単独で観想するよう規定されている。すなわち観想される尊格の数の差異が、両者の名称の差異に関わっていると考えられる。

- 1) 原題について、蔵訳の奥書には上記のように伝えられているが、当儀軌書の帰敬偈を見るならば、『降三世出現』(‘*Jig rten gsum rgyal ’byung ba*, **Trailokyavijayodaya*)であった可能性がある。
- 2) 『一切金剛出現』に説かれる内的な沐浴(=一切法無我の観想)に代わり、「分別を行ずる沐浴」(*nam par rtog pa la spyod pa’i khros*)として、砂や水を用いた外的な沐浴の作法が規定される。同様の作法は『金剛頂タントラ』(*Vajrasikharamahāguhyatantra*)に説示される(VS D 157a3-b1, P 178b1-7)。
- 3) 「後述する次第で破魔などをなして」(TV D 67b7-68a1, P 76b6-7)とあり、マンダラ作成の箇所の記述(TV D 85a3-b4, P 97a3-b7)を参照するよう説かれる。
- 4) a. 百字真言の読誦, b. 自身灌頂, c. 金剛の歌・八供養による供養, d. 金剛の言葉による金剛薩埵との同一化, e. 金剛杵・金剛鈴・三昧耶の意味の修習, f. 金剛薩埵の讃嘆から成る。プトゥン(*Bu ston rin chen grub*, 1290-1364)は、『一切金剛出現』の注釈書『如意宝珠』(*Yid bzhin gyi nor bu*)において、これら諸儀礼を「[加持・灌頂・供養・サマーディという]四神変のうちの上位のものの解説」(YN 101a4-5)という科段にまとめている。この「神変」は四印の刻印と共に「[集会を成就するまでに、薩埵の読誦者と如来の読誦者の儀軌があるが、その]二つを完成させる儀軌」(YN 21b2)として、観想された諸尊の集会を完全なものにする役割を持つと位置付けられる。
- 5) ヴァジュラフーンカーラのマントラ(STTS §656)に含まれる *om, sumbha, nisumbha, hūm, phaṭ* という語の意味を解説する。
- 6) 『真実撰経』に説かれる金剛薩埵による諸天の調伏(STTS §§619-843)を観想する。
- 7) 「6-1. 自身灌頂」の冒頭に、「もしマハーヨーガを行いたいならば、以前と同様に三昧耶薩埵として加持し、大印を結ぶまでの儀軌(= 4. 自身加持)を随行して」(TV D 74b7, P 84b2-3)とあり、それまでの諸儀軌がマハーヨーガを行わない場合の規定であることが分かる。また「9-1. Ādiyoga」には、「悉地金剛の禁戒の終わりまでの儀軌を随行し、マハーヨーガか、あるいは一つのヨーガを伴った大印を結んで」(TV D 76b6-7, P 86b6-8)と、マハーヨーガを行わない場合を「一つのヨーガ」と呼んでいる。
- 8) 四処加持以下の次第は以下の通り。なお、丸括弧内には注4で述べた「神変」との

Ānandagarbha 著『降三世曼荼羅儀軌』の前行儀軌について (伊集院) (93)

対応関係を示した。5-4：四処加持，百字真言 (= a)，金剛頂鬘・光聚の観想，5-5：自身灌頂 (= b)，四秘密供養 (= c)，金剛杵・金剛鈴・三昧耶の意味の修習 (= e)。6-3：四処加持，百字真言 (= a)，金剛頂鬘・光聚の観想，自身灌頂 (= b)，6-4：尊格の配置，6-5：三マントラの修習，ヴァジュラフーンカーラの観想と金剛の言葉・忿怒の言葉の読誦 (= d)。

- 9) 『降三世曼荼羅儀軌』に基づくプトゥンの儀軌書『降一切魔』(*bDud thams cad las rnam par rgyal ba*) は、一つのヨーガを行う場合についても、大印成就法の前に自身灌頂を行うよう規定する (DN 15a7-b1)。
- 10) ただし「6-2. 三十二尊の大印成就」ではヴァジュラフーンカーラと金剛鈴の大印成就法のみが説かれ、三十二の尊格の名称は「6-4. 尊格の配置」で言及される。なお、『降一切魔』には三十二の尊格全ての大印成就法が規定される (DN 12a1-13a5)。

〈一次文献・略号〉

- DN Bu ston rin chen grub. *bDud thams cad las rnam par rgyal ba*. Toh no. 5119. *The Collected Works of Bu-ston*. Part 12. Śata-piṭaka Series 52. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1968.
- STTS *Sarvatathāgatattvasaṃgraha*. 堀内 1974, 1983.
- SV Ānandagarbha. *Sarvavajrodaya*. 密教聖典研究会 1986, 1987; 高橋 1988. D no. 2516, P no. 3339.
- TV Ānandagarbha. *Trailokyavijayamaṇḍalopāyikā*. D no. 2519, P no. 3342.
- VŚ *Vajrasikharamahāguhyayogatantra*. D no. 480, P no. 113.
- YN Bu ston rin chen grub. *Yid bzhin gyi nor bu*. Toh no. 5105. *The Collected Works of Bu-ston*. Part 11. Śata-piṭaka Series 51. New Delhi: International Academy of Indian Culture, 1968.

〈二次文献〉

- 杉木恒彦 1995 「Ānandagarbha の曼荼羅成就法論」『インド哲学仏教学研究』3: 33-46.
- 高橋尚夫 1988 「金剛界大曼荼羅儀軌一切金剛出現——余滴——」『豊山学報』33: (1)-(58).
- 堀内寛仁 1974, 1983 『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇 (上) (下)』密教文化研究所.
- 密教聖典研究会 1986 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳—— (I)」『大正大学総合佛教研究所年報』8: (23)-(57).
- 1987 「Vajradhātumahāmaṇḍalopāyikā-Sarvavajrodaya——梵文テキストと和訳—— (II) 完」『大正大学総合佛教研究所年報』9: (13)-(85).

〈キーワード〉 Ānandagarbha, 降三世曼荼羅儀軌, *Sarvavajrodaya*

(東京大学大学院)